【登録有形文化財（建造物）】

由加神社拝殿及び幣殿、由加神社三宝荒神社本殿、由加神社大鳥居

（１）所 在 地　　倉敷市児島由加

（２）所 有 者　　個人

（３）概　　要

由加神社本宮は、倉敷市市街地から南東約 13 ㎞離れた瑜伽山の山中にあり、南方約 4 ㎞先には瀬戸内海が広がる。開基は奈良時代に遡ると伝えられているが、定かでない。その後の変遷も不詳であるが、江戸時代中期には備前藩主池田氏の祈願所となり、池田氏が神社社殿を造営したと伝えられている。現在は西日本を中心に末社 52 社を有し、厄除けの総本山として広く知られている。

現在の由加神社境内は南北に細長い長方形で、南側参道北端の石階段を登った広場東側に備前焼の大鳥居を構えて、境内出入り口としている。境内北側に切石によってやや高く造成された基壇上に拝殿及び幣殿を建て、その奥には本殿が建ち、本殿東側に三宝荒神社本殿が建っている。なお、本殿は昭和 36 年に岡山県の指定重要文化財に指定されている。

拝殿及び幣殿の建築年代は、棟札写しから、安永６（１７７７）年と考えられ、虹梁（こうりょう）や木鼻（きばな）の彫刻や模様にも安永期頃の特徴が認められる。拝殿は比較的規模が大きく、入母屋造平入（いりもやづくりひらいり）で千鳥破風（ちどりはふ）と向拝（こうはい）を設け、北側背面には切妻造銅板葺（きりづまづくりどうばんぶき）の幣殿を延ばす。さらに天保９（１８３８）年、南側前方に向唐破風造（むこうからはふづくり）向拝を増築し、独特な形式となっている。彫刻や錺（かざり）金具で濃密に装飾され、意匠的にも技術的にも価値が高い。また、建築年代が明確で歴史的な価値も高く、貴重である。

三宝荒神社本殿の建築年代は、装飾文様やその他の特徴から、江戸後期と推定される。規模は桁行 1 間、梁間 1 間と小規模であるが、正面を入母屋造、背面を切妻造、銅板葺で妻入とする。正面に 1 間の向拝を付し、三方に擬宝珠高欄（ぎぼしこうらん）付きの縁を廻す。元は壁面を除いた全体にベンガラが塗られていたと見られ、平成９（１９９７）年に、向拝と正面縁周りを塗装。板状の頭貫木鼻など古い特徴を残した丁寧な造りで、意匠的にも技術的にも価値が高い。

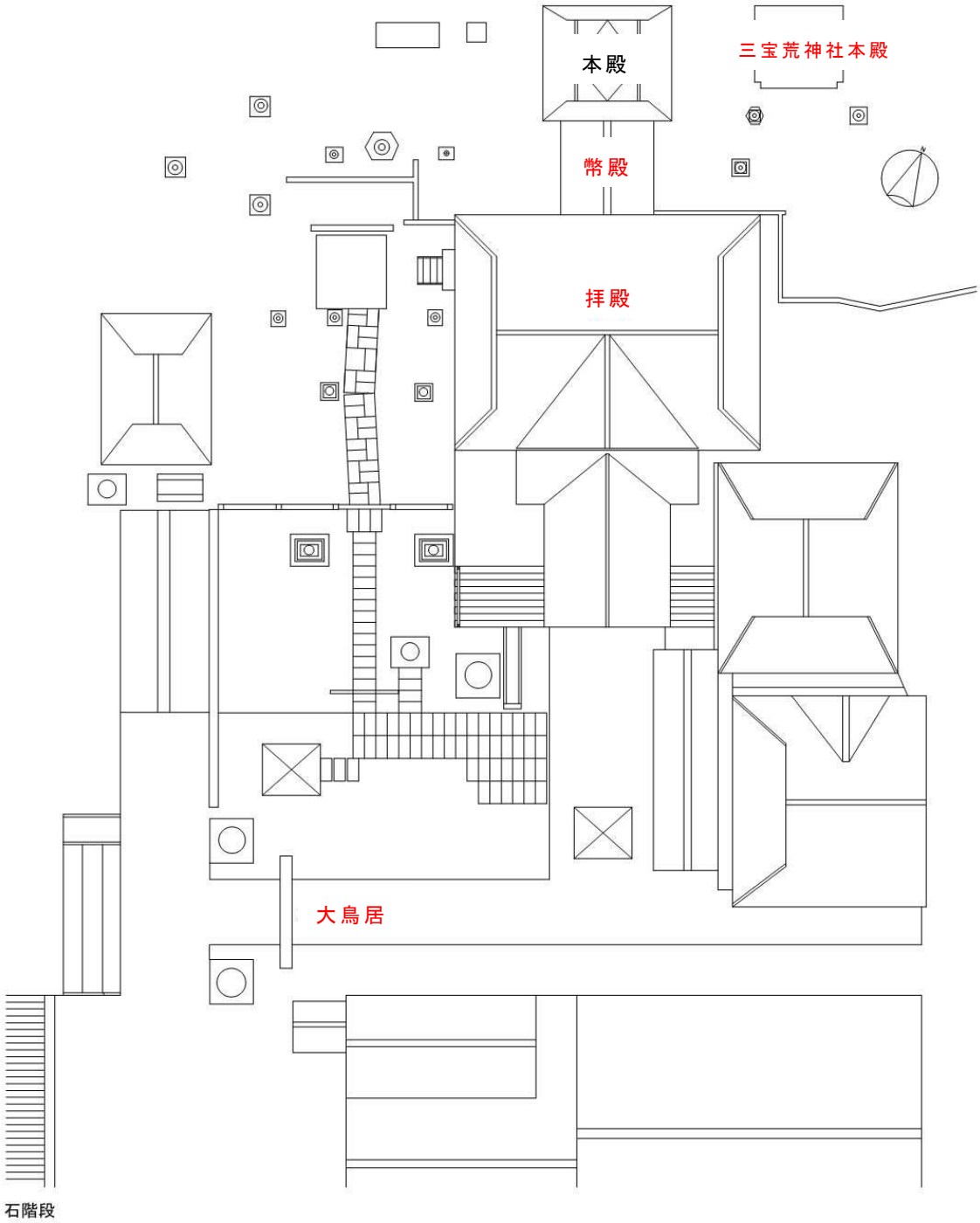
大鳥居は備前焼の部材を組み上げて造られた、特異な鳥居である。柱間約３.2m、高さ約 4.7m、柱の最大径約 0.4m で、柱には「明治廿七年」「一月建立」と刻銘がある。全体に春日鳥居の特徴を有するが、一般的な春日鳥居と比較して特に柱太さに対して貫や島木・笠木の寸法が通常より大きく造られている。建造年代が明確なうえ、高度な技術で製作した大規模備前焼作品であり、岡山の地域性を示す文化財として重要である。

（4）登録基準　　一　国土の歴史的景観に寄与しているもの

★現地
木見駅
三軒茶屋
天満山
123
松楠山
235
福南山
瀬戸大橋線
伊津井峠
森池
奥ノ谷
西原
尾原
奥迫川
地蔵峠
常山
307
用吉
秀天橋
樋田口
小島地
豊岡
鬼入道山
191
木目
迫間
荘内小
荘内中
中谷
蓮台寺
児島由加
少年自然の家
琴浦北小
広岡
石鎚山
155
石脇
長尾
鴻巣山
170
祇園山
99
鶴川
金刀比羅山
161
永井
玉原3
玉原1
穂田南
児島柳田町
児島上の町
児島白尾
仙隠山
278
上の町駅
中山団地北
上の町北
上の町
児島小
瀬戸中央道
大橋線

瑜伽山
由加神社
児島由加簡易郵便局

位置図



配置図

①拝殿及び幣殿　正面

②拝殿及び幣殿
向唐破風造向拝　見上げ

③三宝荒神社本殿　正面

④（左）⑤（右）

⑥大鳥居　正面

⑦大鳥居　柱刻銘「明治廿七年」

⑧大鳥居　柱刻銘「一月」

【用語解説】

・拝殿（はいでん）：祭礼に際して祭員が着座したり礼拝するための殿舎（出典１）

・幣殿（へいでん）：本殿と拝殿の間にあって、参拝者が幣帛を捧げるための建物（出典 1）

・虹梁（こうりょう）、木鼻（きばな）：建物内部の部位（図１参照）

・向拝（こうはい）：社殿や仏殿の正面に差し出された構造物。庇（出典１、図２参照）

・入母屋造（いりもやづくり）、切妻造（きりづまづくり）：屋根の形状（図３参照）

・平入（ひらいり）、妻入（つまいり）：入口の位置が建物の長手側（平）にあるものが平入、切妻屋や入母屋の三角形になった側や短辺側にあるものが妻入（出典１、図４参照）

・千鳥破風（ちどりはふ）、唐破風（からはふ）：破風とは屋根の妻側において山形に取り付けられた板及びその付属物の総称。形状と位置によって唐破風、千鳥破風などと呼ばれる。（出典１、図２参照）

・向唐破風（むこうからはふ）：軒先だけでなく、屋根全体を丸く作った唐破風。

・擬宝珠高欄（ぎぼしこうらん）：高欄とは日本建築で縁や廊下、あるいは橋につく欄干をいう。端部及びその他の位置において擬宝珠(ぎぼし)を頂部に載せた柱を立てているものを擬宝珠高欄と呼ぶ。（出典１、図２参照）

・頭貫（かしらぬき）：貫とは柱を貫いて相互に繋ぐ横木。主として社寺建築において柱頂部に渡してある貫（出典１、図４参照）

・春日鳥居（かすがとりい）：鳥居形式には島木のない神明鳥居系統と島木を持つ明神鳥居系統とに大別される。春日鳥居は明神鳥居系統で、笠木と島木の反りもがないか少ない特徴を有する。（出典１）

出典１　彰国社編 1993 『建築大辞典第２版』　彰国社

出典２　小林一元・高橋昌巳・宮越喜彦・宮坂公啓編著 1997 『木造建築用語辞典』井上書院

出典３　文化庁歴史的建造物調査研究会編著 1994 『建物の見方・調べ方　江戸時代の寺院と神社』きょうせい

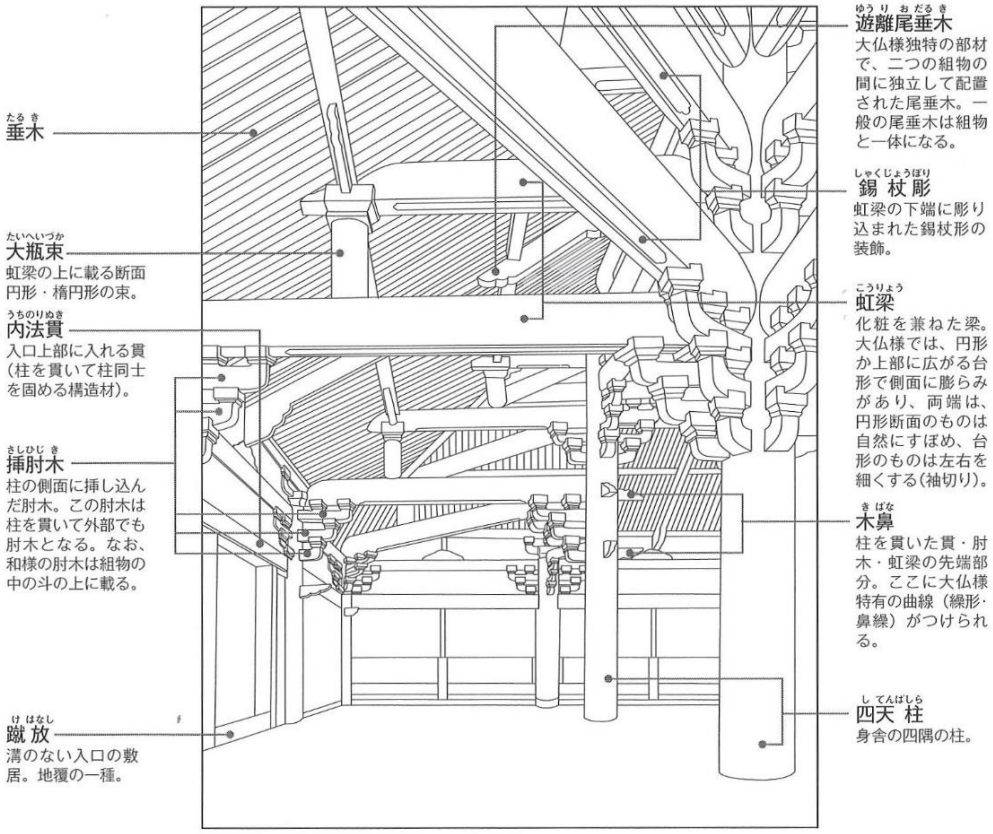


図１　木造建築内部の各部名称（出典２）

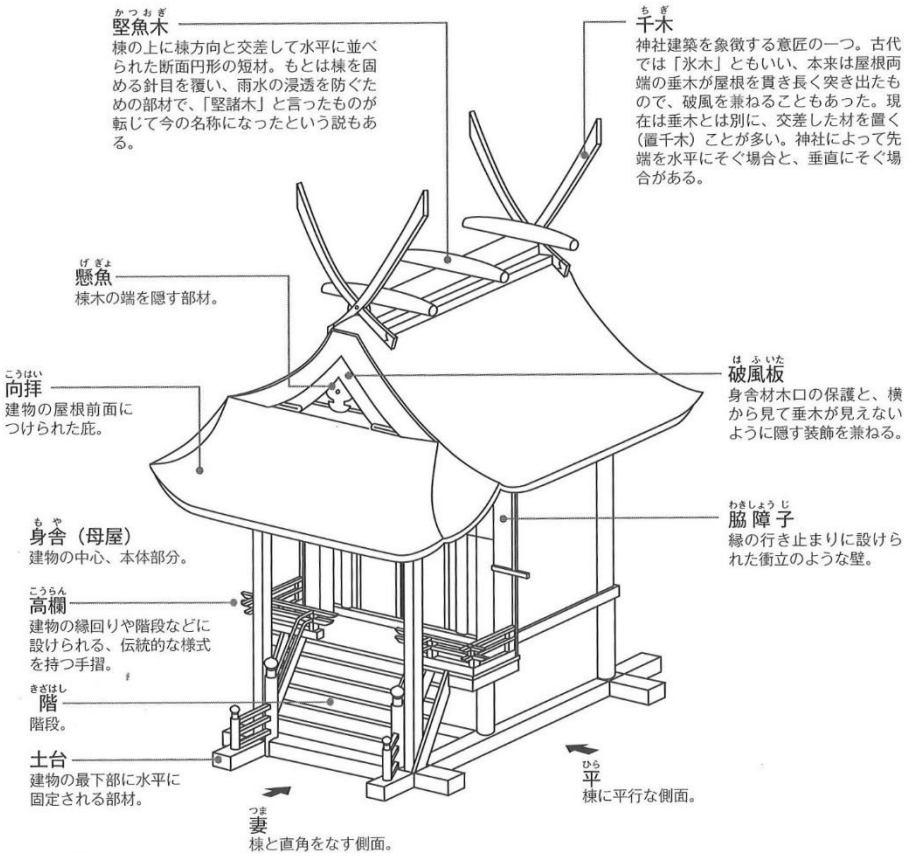


図２　神社の部位名称（出典２）

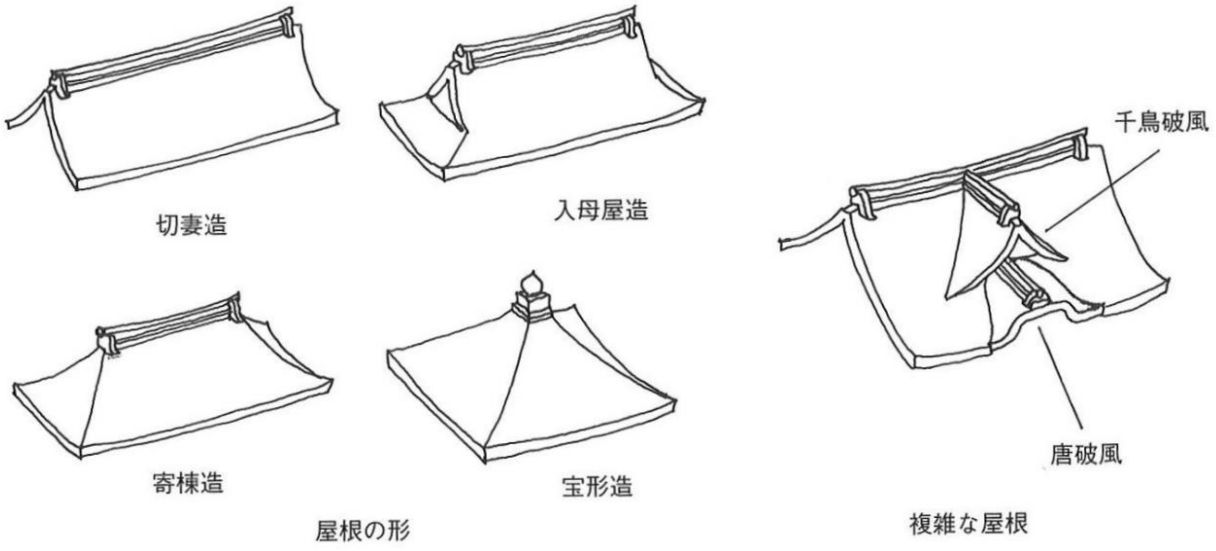


図３　屋根の形状（出典３）

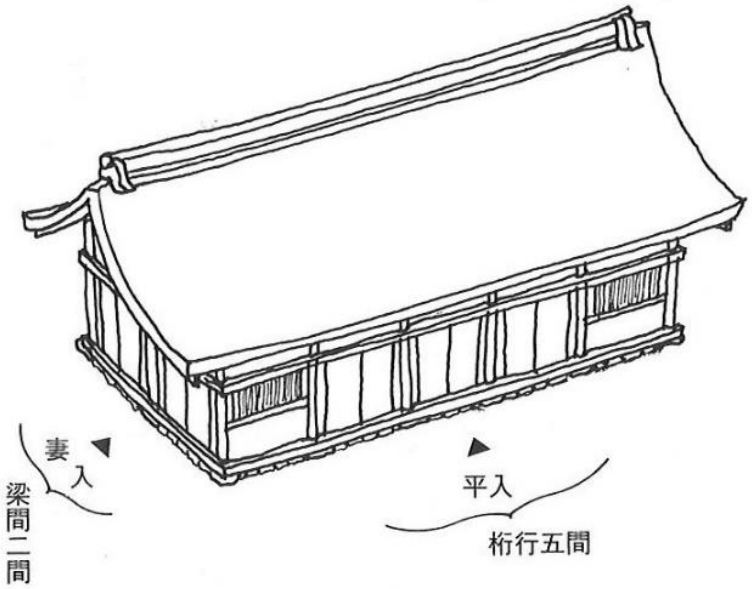


図４　妻入と平入（出典３）

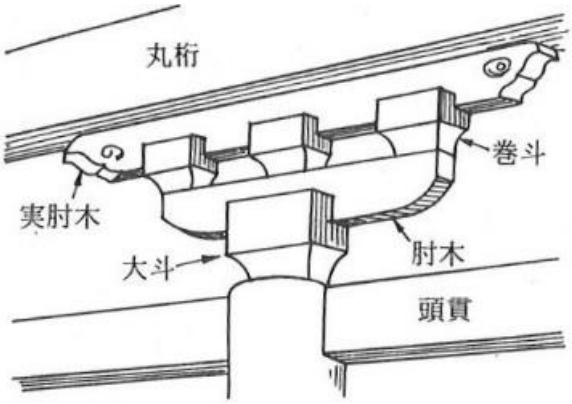


図５　頭貫の位置（出典１）